

<p style="text-align: center;">感 謝</p> <p>中古デジカメ、老眼鏡、手作りノート、鉛筆。それぞれを精巧な伝統織や刺繍作業で生計を支える先住民族の女性たちに、そして、山の子どもたちにお届けしました。</p> <p>女性たちの感謝、こどもたちのはにかみながらの「ボンカムドン（ビラーン語でありがとう）」をお伝えします。</p>	 <p>2011年1月25日発行</p>	<p>NPO 法人ビラーンの医療と自立を支える会 (英文名略称・HANDS)</p> <p>本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11 TEL:045-962-0824 FAX:045-962-1933 E-mail: hands-ty@r07.itscom.net http://homepage3.nifty.com/hands/ 郵便振替口座 00210-5-72693 (加入者名) ビラーンの医療と自立を支える会</p>
--	---	--

たとえ山腹斜面でも土地があることの重みとそれを手放す人々

— プランテーション契約増加や医療・教育費のため土地を抵当に入れるケース —

昨年11月末の訪問初日、空港に出迎えてくれたCMIP エドウィン神父の車で訪ねた村タンダでまず目についたのは、緩斜面を方形に切りとった数面のプランテーション（大規模農園）でした。簡易水道事業モニター時の6月にはありませんでした。その時すでに神父からは「水道があれば乾季の灌水ができるので高原野菜栽培を始めたい、プランテーション土地賃借契約の誘いにのらないように、確実に収入が増える農業支援を急ぎたい」と、衛生面にとどまらない水道開通の意義、期待を聞いていましたが、これほど早くタンダ村にパイナップル農園が進出してくるとは正直想像していませんでした。



エドウィン神父 (11月・タンダ村で)

農園主ドールとの契約は、5年間の借地料として住民は1haにつき4万ペソ(約8万円)を一括して受け取るというものです。コーンや内職のバーベキュー用竹串作り(100本1束で1ペソ)等の収入合計が年1万ペソに満たない住民にとって4万ペソは魅力です。残された急斜面にある畑だけでは家族が毎日食べる食糧に事欠くことは分かっても、当面の医療費や教育費に困っている場合は契約拒否の選択は難しいでしょう。

11月訪問の4日目に訪ねたPPFと協働してアグロフォレストリー事業を行っている村タラヒクでも、土地を手放した事例に出会いました。親類宅に寄留してブラクールハイスクールに通っていたHANDS奨学生リベルトのケースです。叔父に伴われて住民集会に顔を見せた彼の首には皮膚がんの手術跡がありました。2年前の4年生在学中病気になり、実家のあるタラヒク村に戻った彼の治療のため、親は土地を抵当に入れてお金を借りたようです。今回のアグロフォレストリー対象はタラヒク村約100世帯中25世帯と限られていて、土地が抵当に入っている彼の家族は含まれていません。

1年近く前にも奨学生の親が畑を手放す選択を迫られた事例がありました。「卒業時に必要な経費(奨学金予算対象外)のうち2000ペソ(約4千円)が足りなくて、父親が畑を売りに出した奨学生がいる。託されている支援者からの卒業祝いを充当していいか」という連絡が現地訪問中のスタッフから入った時、4千円のために畑を売る理不尽さを支援者もご理解下さると考えて即承諾の返信をしました。

以上は氷山の一角にすぎません。先祖伝来住み続けた土地の使用権を認める法律(IPRA)ができてからも、現実には医療や教育費の都合がつかずにその使用権を手放す先住民族はたくさんいます。

土地も教育もない都市部の最貧層に比べると、山腹斜面でも耕す土地がある山の先住民族は幸せかもしれないことがあります。貴重な土地を手放さない賢明な選択のための教育支援は今後とも最優先課題であるとともに、医療保険加入推進や高原野菜栽培などの代替収入源の支援も急がれます。

今年も先祖伝来の土地で生きる人々を支えていけたらと思います。よろしくお願いします。(山崎)